

プラトン『ポリティコス』におけるパラダイグマ

中島 立博

1. 導入

プラトン『ポリティコス¹』では、主役たるエレアの客人が、政治家を定義する形で若いソクラテスと探求を行う傍ら、探求方法に関する考察を対話編の各所で行う。『ポリティコス』での主な探求方法は分割法(分割と総合の方法)であるが、本稿が取り扱う「パラダイグマ」もまた、政治家の探求を遂行する上で不可欠な方法とされる。

この二つの方法は、従来の研究では互いに独立した方法として扱われる傾向にあり、両者の内的な関連性はあまり問題とされてこなかったと言える²。本稿では、従来の研究の解釈をひとつひとつ検討するのではなく、客人がパラダイグマの方法を規定する重要なテキスト (*Plt.* 278a8-c6, e4-10) を分析することで、パラダイグマと分割法の関連性、特に分割の対操作たる「総合」との関連性を探る(第2節)。次に、その分析をもとに、パラダイグマの実際の使用例を調査し、総合とパラダイグマの関連性を明らかにする(第3節)。

2. テキスト解釈 (*Plt.* 278a8-c6, e4-10)

パラダイグマが導入される文脈は次のようになる。「自発的に支配を受ける二足の動物を対象とした、自発的な集団飼育術」としてエレアの客人は政治術を定義し、若いソクラテスはこの定義を完全なものを見なす (276e10-277a2)。しかし、客人によればこの定義は十分な輪郭を持っているが、なお明瞭な色彩を欠いた絵画のようなものであり、不十分な定義である (277b8-c3)。若いソクラテスはどの点が不十分なのか、客人に明らかにするよう促す。客人はすぐには定義の不十分な点を述べようとしない。かわりに、「パラダイグマを用いることなしに、より重大な事柄のうちの何がしかを十分に明らかにすることは難しい」 (277d1-2) と述べ、政治術の定義を行う上でのパラダイグマの必要性を主張する。しかし、このパラダイグマとは何であるのか、直接的に客人は示さない。彼は人間の「知識に関する状態」に言及し、パラダイグマを説明するためには、更なるパラダイグマ

が必要であると述べる (277d6-10)。

この「パラダイグマのパラダイグマ」として客人が持ち出すのは、子供の文字綴り (単語のスペル) の学習である (277e2-4)³。その学習の場面で子供たちは、最も短く平易な綴りでは文字それぞれを十分に判別し、その綴りを正しく述べることができる。だが、その他の綴りでは、平易な綴りで正しく認識していた文字と同じ文字を見誤ってしまう (277e6-a3)。そこで教師は次のようにして彼らが未だ正しく認識していない綴りを教える。

まず、[彼ら子供たちを] 彼らが同じ文字だと正しく判断 (同定) しているその [既知の平易な] 文字列 (綴り) へ、再び導く。導いたら、その文字列を彼らがまだ認識していない文字列の隣に置く。こうして [両者を] 比較させたら、両方の結合 (綴り) の内に、同じ類似性および同じ本性 (τὴν αὐτὴν ὁμοιότητα καὶ φύσιν) があることを示す。(278a8-b3)

例えば、embarrassing という綴りを子供が学習しており、彼は b という文字を正しく同定できていないとしよう。教師はその場合、ball といった短く平易な綴りを再認識させ、両者を比較させることで、ball と embarrassing の内に「同じ類似性および同じ本性」があることを示す。

注目すべきは、「同じ類似性」という一見すると冗長に思われる表現である。あるもの X が別のもの Y に類似している場合、その関係性は一方的ではなく、双方向的に Y もまた X に類似していると言える。この類似関係の双方向的性は、たとえ X が原物であり、Y が X を模倣した像であっても認められる⁴。このように、類似関係は常に双方向的であることから、「同じ」と形容する必要はないように思える。しかし、像と原物の類似関係では、像は実物に対しより劣ったものとして類似するのに対し (Phd. 74a5-7)、原物は像に対して範型たる完全なものとして類似する。従って、像と原物の間の類似性は、双方向的ではあるものの、厳密な意味で「同じ」とは言えない⁵。

では、厳密な意味での「同じ類似性」が認められるのは、いかなるケースだろうか。あるものと別のもの間に類似性が成立するためには、ある観点において両者が「同じ」である必要がある⁶。例えば、「空と海は類似している」と言う場合、「青い」「広大である」といった観点において、両者が「同じ」という事態が、その類似性を成り立たせる。この空と海の類似性は、双方向的であるのはもちろんのこと、原物と像の間の類似性とは異なり、「同じ」類似性であると言える。こ

これは、類似を成立させる観点が、空と海の場合では一般性・普遍性をもつのに対し、原物と像の場合は原物のもつ固有性とその観点となるためであると言える。すなわち、原物はその原物のもつ固有性という点で特権性を有するため⁷、原物と像の類似性が厳密な意味で「同じ」とならないのに対し、空と海の場合はどちらも青さや広大さという点で、その属性を特権的に有するのではなく、あくまでその属性を有する一例として、同じステータスにある。このように、二項間の類似性が「同じ」と言えるためには、その類似性を成立させる観点が、ある種の普遍性や一般性をもつ必要がある。つまり、二項に加え、第三の上位の概念が必要となる⁸。

以上の解釈を踏まえれば、引用中の「同じ本性」は、「同じ類似性」を成り立たせるための、第三の上位概念として理解できるだろう。先の *ball* と *embarrassing* の例を用いれば、両者には「同じ類似性」があり、その類似性が認められるのは、*b* というさまざまな綴りにおいて現れる普遍的な文字が両者に「同じ本性」として含まれているためである。直後の記述はそのことを示している。

この（上述の引用の）手順は、次のようになるまで続けられる。すなわち、彼らが知らない綴りの文字すべてに、真実に判断されている文字列（綴り）が隣に置かれて示され、そうして示されたのち、[隣に置かれた文字列が] このようにしてパラダイグマとなることで、[パラダイグマによって] すべての文字それぞれが、あらゆる綴りにおいて、一方では他の文字と異なっているゆえに異なると（*τὸ μὲν ἕτερον ὡς τῶν ἄλλων ἕτερον ὄν*）、他方では常に同一の仕方ですらと同じでありあるゆえに同じだと（*τὸ δὲ ταῦτόν ὡς ταῦτόν ἀεὶ κατὰ ταῦτὰ ἑαυτῶ*）、呼ばれるようになるまでだ。（278b3-c1）

例えば、*ball* のように正しく認識されている綴りは、その他の複雑で未だ正しく認識されていない綴りに含まれる文字を認識するために用いられる。パラダイグマとしての *ball* は、文字 *b* がその他のあらゆる綴りにおいても自己同一性を保ち、その他の文字とは異なっていると、生徒が認識するまで用いられる。もちろん、この学習が目的とするところは、*b* という文字それ自体を学ぶことではなく⁹、*b* を含むあらゆる綴りを学ぶことにある。また、この学習法は文字 *b* に限られず、全ての文字に関して用いられる。その最終的な目標は、生徒があらゆる綴りを認識できるようになること、すなわち文字綴りの技術に上達することである（cf. 285d2-3）。

注目すべきは、「同 (ταυτόν)」と「異 (ἕτερον)」への言及である。文字綴りの技術を習得するためには、その綴りが含む文字、例えば **b** を他の文字と取り違えてはならず¹⁰、**b** がその他の文字とは異なり、自己同一性を常に保つことを、あらゆる綴りにおいて認識しなければならない。先の「同じ類似性」を成立させる観点であった **b** は、様々なケースにおいて他と異なり自己と同一であることで普遍性を有する¹¹。このようにパラダイグマは、単に二項間のみ限定されるのではなく、二項が含む同一の普遍的な要素に依拠する。こうした特徴は分割法における「同」と「異」への言及にもみられる。「類に即して分割する、すなわち同じ種を異なると見なさず、異なる種を同じと見なさないこと¹²」(*Soph.* 253d1-2¹³; cf. *Plt.* 285a-b)。分割法は、ある探求の対象に定義を与えるために、上位のひとつの類を下位の複数の種に分割し、探求の対象が属する種を規定する。類種はその際、探求の対象が属する一般的・普遍的な集合、ないしその対象が有する普遍性をもつ概念として扱われる。分割法を用いる際には、文字綴りの学習においてパラダイグマが用いられるのと同様に、より普遍性のある概念の同一性、および他の概念からの差異を見極める必要がある。このように、分割法とパラダイグマは、両者ともに「同」および「異」に依拠するという特徴を備えている。

無論、パラダイグマにおいて、より焦点が当てられるのは「同」である。あるものが別のもののパラダイグマとなるには、両者とも「同じ本性」を持ち、「同じ類似性」を有していなければならない。この「同」に焦点を当てた形で、客人は文字綴りの学習の例から、パラダイグマが生じるケースを一般化する。

さて、われわれはこのことを十分に理解した。つまり、パラダイグマが生じるのは、次のような場合である。すなわち、「同じである (ὄν ταυτόν)」ものが、区別され異なったものの内に (ἐν ἑτέρῳ διεσπασμένῳ)、正しく判断 (同定) され総合される (δοξαζόμενον ὀρθῶς καὶ συναχθέν) ことによって、両者としてのそれぞれ¹⁴についてひとつの真なる判断 (μίαν ἀληθῆ δόξαν) を完成させる時であると。(278c3-6)

「パラダイグマが生じる」ということは、問題となるあるもの **X** を明らかにするために、別のもの **Y** がパラダイグマとなることである。このとき、**Y** は **X** とは区別された異なるものであるが、両者が比較されることで、**X** のうちのある要素が、**Y** の内にある要素と「同じである」と正しく同定される。このようにして、**X** と **Y** は総合され、両者それぞれについて、「ひとつの真なる判断」が下される。その

判断は、両者がともに自己同一性を保つ要素を含むという認識に基づき、両者をそのひとつの観点のもとに統合する。

ここにおいて「総合 (συναγωγή)」とパラダイグマの明確な関連性が見出される¹⁵。『パイドロス』では、総合は「多くの場に散らばっているもの (τὰ πολλαχῆ διεσπαρμένα) を総覧することで、ひとつの相へとまとめること (εἰς μίαν ιδέαν ἄγειν)」(265d3-4) として規定される。具体的な総合の使用例を挙げれば、ソクラテスのエロースに関する第一の演説では、エロースは肉体の美を求める欲求が支配的になった状態として、飲食その他の多岐に渡る「放縦」という「ひとつの相」のもとに位置づけられる (237d-238c)。他方、パラダイグマが生じる契機となる「ひとつの真なる判断」は、別々の X と Y を、両者が共通して含む同一の要素に依拠することで、その観点のもとに両者を統合する。このように、総合とパラダイグマは、複数の別々のものを、同じひとつのより普遍性を持つ観点のもとに統合するという点で軌を一にする。

パラダイグマが生じるケース一般においてみられる、「総合的」性格は以上である。しかし、哲学的探求において用いられるパラダイグマには、二項間の総合のみならず、あるひとつの観点のもとに属する事物「全体」を総合する働きも見られる。次の引用における「全体」と「部分」への言及は、その働きを明示している。

さて、実情が本性的に以上のようになっているならば、私と君が、(A) 一方でまず、部分としての些細で別なもののパラダイグマの内に (ἐν μικρῷ κατὰ μέρος ἄλλω παραδείγματι)、パラダイグマ全体の本性 (ὄλου παραδείγματος¹⁶ […] τὴν φύσιν) を見てとることを試み、(B) 他方その次に、最大たる国王に関する事柄に対し、どこかより些細なものどもから同じ相 (ταὐτὸν εἶδος) をもってくることで、今一度パラダイグマを通じて国家のもとにいる人々が行う奉仕を、技術的に見分けることを試みようと思図しても¹⁷、調子を外しているということはまったくないであろう […]。(278e4-10)

この引用の前半 A では、パラダイグマのパラダイグマとして持ち出された、子供の文字綴りの学習という些細な事例が、パラダイグマ「全体」の本性を見る上での「部分」であったと言われる。つまり、A が言及しているのは、上述の文字綴りの学習におけるパラダイグマの使用例 (278a8-c1) と、その例からの一般化 (278c3-6) に他ならない。後半 B では、A で行われたパラダイグマ全体の本性の

把握を踏まえた上で、国王の技術（政治術）と「同じ相」をもつ些細な技術をパラダイグマとして選出することで、国家に関わるさまざまな技術から国王の技術を区別することが意図される。注目すべきは、Aの段階で文字綴りの学習という例によって、パラダイグマ一般について普遍化がなされ、その本性が見てとられると明言されている点である。また、文字綴りの学習は、政治術の探求におけるパラダイグマの使用を直接的に説明するのではなく、パラダイグマ全体の本性を解明するために用いられることで、間接的に政治術の探求でのパラダイグマの使用を説明する。このように、パラダイグマとしての文字綴りの学習は、「同じ本性」を有する二項間を中心として用いられるのではなく、ある全体の特徴を明らかにするための一例として用いられる。

このような全体の特徴を明らかにするパラダイグマの役割もまた、総合と関連づけて理解することができる。分割の出発点となる類を規定する先行的综合は、ある特徴を共有する事物を網羅的に総括することで、ひとつの全体を形成する¹⁸。

また、分割と同時に行われる総合¹⁹は、分割によって分けられた類の部分に属する事物全てを総括し、またひとつの全体を作る²⁰。『ポリティコス』での総合の手順の規定では、「関連する全てのものをひとつの類似性の内に囲い、あるひとつの類のあり方の内に包括する」（285b2-6）と言われ、全体と総合の関連性が強調されている。こうした総合によってもたらされる網羅性は、分割法による議論を論理的に妥当とする重要な要因のひとつである²¹。文字綴りの学習というパラダイグマもまた、パラダイグマの「全体の本性」を明らかにする役割を担うことから、その他のパラダイグマの使用においても、ある全体が共有する特徴を明らかにするという「総合的」性格が見出されることが予期される。

3. パラダイグマの使用例

これまで、パラダイグマに関するテキストに即し、パラダイグマの「総合的」役割を見た。ひとつが同一の本性に基づく二項間における総合であり、もうひとつがひとつの例からある全体における特徴を見出す総合である。次に、実際にパラダイグマを用いた議論において、これら「総合的」役割がどのように活きているのか、見ることにしたい。

時として、『ソフィステース』における魚釣り師のパラダイグマは、パラダイグマの使用の典型例と見なされる²²。しかし、魚釣り師のパラダイグマは、ソフィストを定義する上で用いられる分割法を例示する、つまり方法の訓練のための主

題という役割が主である²³。確かに、ソフィストの第一定義では、魚釣り師がソフィストと「同類 (συγγενής)」であることが強調されるが (221d8-9)、第二から第五定義では、魚釣り師が属する類とは異なる類から分割が始められる。このことは、魚釣り師をパラダイグマとして用い、ソフィストとの「同じ本性」をひとつひとつ明らかにせずとも、ソフィストに至る分割が独立して行われうることを示唆している。また、魚釣り師のパラダイグマは、文字綴りのパラダイグマのように、方法の「全体の本性」を明らかにすることもない。

パラダイグマの使用の典型例と見なすべきは、ソフィストの第七定義における使用である。パラダイグマが用いられる文脈までの議論で、客人はソフィストがあらゆるものに関して「真正の知識」を持たず、「憶測的な知」しか有していない結論する (233c10-11)。この点をより明確にするため、客人はパラダイグマとして絵画術を取り上げる。ソフィストが短時間の内にあらゆる事柄を語り、わずかな報酬を受け取るのと同様に、画家は短時間であらゆるものを描き、わずかな代金を受け取る (234a3-10)。こうした「見戯」は多種多様であるものの、客人はそれら全てを一へと集め (εις ἓν πάντα συλλαβόν)、「真似事」と規定する (234b1-4)。

この第七定義でのパラダイグマの使用には、先に確認した二つの「総合的」性格が現れている。ソフィストは自らが扱う事柄について真正なる知識を持っていないということが、「同じ本性」を有する画家というパラダイグマの内に明らかにされる。この点で、二項間における総合が行われていると言える。さらに、その総合をもとに、関連する多種多様な見戯「全て」が、「真似事」という類の内に総合される。この点で、ひとつの全体を形成する総合の役割が見られる。

では、その他のパラダイグマの使用では、どのように「総合的」役割が見られるだろうか。政治術のパラダイグマとしての機織り術の使用を取り上げたい。先の引用 (278e4-10) でパラダイグマに関する議論を終えた客人は、政治術のパラダイグマとなるものを選出するに先立ち、パラダイグマが必要とされる理由を述べる。先の政治家の定義 (276e10-15) のままでは、国王に対して国家の「世話」を争う人々が、未だ数多くいる。彼らを国王から切り離し遠ざけるため、パラダイグマが必要とされる (278a1-5)。そのためのパラダイグマとなるものは、「政治術と同じ活動 (ή αὐτὴ πολιτικῆ πραγματεία) (279a7-8) ないし「同じ相 (ταυτόν εἶδος) (278e8)、「同じ類似性および同じ本性」 (278b1-2) をもっていなければならない。政治術の探求そのものは、政治術の原因と補助原因を分割することから再開される (287b)。それにより、国家のもとにいる人々が行う「奉仕」が、技術的に見分けられる (278e10)。

このため、パラダイグマとして選出される技術も、(1)ある対象に「世話」ないし「奉仕」を行い、(2)その世話や奉仕をめぐり多くの競合者に囲まれ、(3)原因と補助原因という二つの原因を所持することが期待される。客人はおそらくこれらの点を念頭に置いた上で、機織り術を選出している (279a7-b6)。政治術の第一定義の場合と同様に、客人は「人間が製作し所有するもの全て²⁴」を繰り返し二分割し、機織り術を「衣服の世話をする技術」として定義する (279c7-280a2)。この定義は、政治術の第一定義が多くの競合者に囲まれることから不十分であったように、衣服に奉仕する技術はその他にも数多くあるため、なお不十分である (280a3-b4)。客人はその点を若いソクラテスに説明し (280b6-281d3)、再度機織り術の定義を試みる。

その試みは、次の分割から始まる。「さてまずは、製作されるもの全てに関して (περὶ πάντα τὰ δρώμενα)、二つの技術があることを看取しようではないか」 (281d8-9)。この二つとは、製作 (生成, γένεσις) のための「補助原因 (συναίτιον)」と「原因 (αἰτία)」である。補助原因が製作に必要な道具類を供給するのに対し、原因は製作の対象となる事物そのものを作り出す (e1-5)²⁵。機織り術における補助原因は杼や紡錘など衣服製作に関与する道具を製作する技術であり、原因は衣服そのものを製作する技術および衣服に奉仕する技術である (e7-10)。

機織り術の再定義では、以上のように、機織り術というパラダイグマを通じて「製作されるもの全て」という「全体」への言及がなされる。そして、この全体は自らの本性として、「補助原因と原因」という二つの原因を有することが明らかにされる。政治術もまた、命令を下すことで「製作 (生成)」に関与することから (261b1-2)、政治術の対象となるもの (ポリス) も、その全体に属するもののひとつであり、補助原因と原因の二つを有する。このように、機織り術のパラダイグマは、ある全体の本性を明らかにするという点で、「総合的」役割を担い、それにより政治術が自らと「同じ本性」を有することを明らかにする。

この補助原因と原因の分割による政治術の定義 (287b-305e) は、国家における様々な技術から政治術が区別されることで成し遂げられる。この定義は、政治術とその他の技術の関係性を明らかにする、いわば外的な定義であるのに対し、それ以降の議論では、機織り術の有する別の本性をもとに、政治術の内実が規定される (305e-311c)。その本性とは、「結合 (συνπλοκή)」 (281a3) であり、政治術もまた「結合」を行うと言われる (306a1-3)。両者の属する「全体」としては、『ソフィステース』第六定義冒頭にて「分離の技術」という類が定められたように、「結合の技術」という類が想定される²⁶。じっさい、勇気と節度という二つの

徳の部分それぞれの所有者が互いに不和となることが明らかにされたのち (306a-308b)、合成を行う「知識全て」(308c3-4) という形で全体への言及が見られる。合成を行う知識は、劣悪なものは可能な限り取り除き、適正かつ有用なものをもとに合成を行うと主張され、機織り術と政治術もそのように振る舞うことが確認される (308c1-309a7)。

このように総合された全体のもとに、両者の類似性が確認されたのち、以降の議論では機織り術が政治術の「似像 (イメージ, εικόων)」として機能する。機織り術が強度ある縦糸と柔和な横糸を織り合わせるように、政治術は勇氣ある人々を縦糸として、節度ある人々を横糸として、両者を織り合わせる (309a8-b7)。ここにおいて、「機織り術のパラダイグマに従った (κατὰ τὸ ὑφαντικῆς παράδειγμα)」 (305e8) 政治術の論究は、機織り術という「似像に従って (κατὰ τὴν εἰκόνα)」 (309b5) 遂行されていることが明らかにされる。では、パラダイグマとは「像 (εἶδωλον)」の一種たる似像に過ぎないのだろうか²⁷。

しかし、厳密に言えば、パラダイグマと像は別物である²⁸。像は絵画や鏡面に現れるように、真正たる原物を真似たものに過ぎず、その存在は原物の存在に依存する²⁹。このように、像と原物の間の存在の身分は異なるのに対し、パラダイグマの関係性は存在の身分が同等の事物間に成立する。文字綴りの学習でパラダイグマとなるものは、短く平易な綴りであり、パラダイグマによって明らかにされるものもまた、綴りのひとつである。両者の間に一方が他方を真似るという関係性はなく、その存在は互いから独立している。同様に、政治術と機織り術の間にも一方が他方を真似るという関係はなく、両者ともに技術であり同じ存在の身分にある。また上述のように、パラダイグマの関係には「同じ類似性」が成立するのに対し、原物と像の間の類似性は厳密には「同じ」と言えない。さらに言えば、原物と似像の関係でも、「パラダイグマ」は似像が製作される場所の原物を意味するため (Soph. 235d6-e2)、両者は全くの別物である。

機織り術が政治術の似像とされる 309a8-b7 の文脈でも、一方が他方を真似るという依存関係は見られない。機織り術の結合は政治術の結合を真似た像であるとは言えず、また逆に政治術が機織り術の結合を範型として真似るわけでもない。じっさい、他の対話篇にも見られるように、勇氣と節度の調和は機織り術の結合になぞらえずとも独立して語られ得る主題である (Rep. 410d-e)。したがって、この「似像」という表現を、文字通り原物と像の関係性を含意していると解すべきではない。

改めて、上述の解釈およびパラダイグマの使用を顧みて、「パラダイグマ」の訳

語を定めたい。主な候補は「モデル」と「例示³⁰ (例)」の二つである³¹。もしパラダイグマの関係性をアナロジーやメタファーのように二項間に限定すれば、「モデル」となるだろう。しかし、モデルと対となるものがコピーであるように、パラダイグマの関係性を二項間のみに限定すれば、像と原物のニュアンスが混入しうる。上述のように、パラダイグマの関係性には像と原物における「真似」は見られない。パラダイグマの関係における類似性もまた、像と原物における類似性とは異なり、「同じ類似性」である。この「同じ類似性」は、普遍性のあるひとつの本性をもとに成立するものであった。この本性を共有するものは、ひとつの「全体」を形成しうるものであり、「パラダイグマとなるもの」と「パラダイグマによって明らかにされるもの」は、その全体の一部である³²。その本性はその全体に渡って常に自己同一性を保つが、「パラダイグマによって明らかにされるもの」は複雑かつ困難な対象であり、その本性を同定することが困難である。「パラダイグマとなるもの」は平易で知られ易い対象であり、その本性を有するもの全体の一例である。したがって、パラダイグマによって困難な対象の有する本性を明らかにすることは、同時にその全体が共有する本性を明らかにすることでもある。このため、訳語を与えたとすれば、「例示」が適切と思われる。

以上のパラダイグマ解釈およびこの訳語は、ソフィストの第六定義冒頭部でのパラダイグマの使用も説明することができる。そこで客人は「濾す、篩う」といった家事に関する名称を複数挙げ、それに対しテアイテトスは次のように応答する。「それらについて、全体として (κατὰ πάντων) どのようなことを明らかにしようとして望んで、それらを諸例 (παραδείγματα) として提示して尋ねているのですか」(Soph. 226c1-2)。客人はそれら些細な家事が「分割を行う³³」ものであり、そうした「分割を行う」もの「全ての内 (ἐν ᾧπασιν)」に共通して、「分離の技術」があることを明らかにする。第六定義では、この分離の技術が以降の分割の出発点となり、最終的にエレンコスの技術が定義される。だが、客人の挙げた「諸例」は、定義の対象たるエレンコスの技術が有する本性を例示するものではない。むしろ、「全体として」や「全ての内」という表現が示しているように、それら諸例を包括する「分離の技術」という類を例示するものである。このように、パラダイグマの「総合的」性格を考慮すれば、二項間の関係性が明示されない使用も説明することが可能となる³⁴。

4. 結論

最後に、本稿のパラダイグマ解釈の要点を整理し、その射程を述べることにしたい。まず留意すべきは、像と原物の関係性とパラダイグマの関係性の区別である。その区別を示す一端は「同じ類似性」という奇妙な表現である。プラトンはこの表現によって、パラダイグマの関係における類似性が像と原物の間の類似性とは異なることを示している。また、像と原物には前者が後者を真似るという点で依存関係にあるのに対し、パラダイグマの関係となる二項には真似による依存関係はなく、両者は互いに独立している。

テキスト解釈の結果、パラダイグマの関係性は、像と原物のような閉じた関係ではなく、あるひとつの「同じ本性」を共有する事物「全体」内での関係であることが明らかとなった。じっさい、パラダイグマの使用例を吟味した結果、ある「全体」のもとで常にパラダイグマは用いられていた。パラダイグマの関係においては、パラダイグマとなる一方は、探求の対象たる他方を明らかにするに留まらず、両者を包括する全体を例示するものでもある。

以上を踏まえ、分割法とパラダイグマの関連性を今一度述べれば、次のようになる。分割法による探求によってある対象を定義する場合、その対象は他のものから区別されるばかりでなく、自らと関連するものとの関係で特徴付けられる。この特徴付けは、関連するもの全てを「ひとつの類似性」によって集めた上で、「類」を規定する、すなわち総合を行うことで成し遂げられる (*Plt.* 285b2-6)。この類全体における「ひとつの類似性」は、パラダイグマと探求の対象との間に「同じ類似性」として部分的に成立する。このことは、パラダイグマとなり得る価値的に些細で知られ易い対象との間に類似性を見出すことが、総合の契機となることを示している。客人は「分割法は対象の価値を度外視する」と繰り返し強調する (*Soph.* 227a-b; *Plt.* 266d)。もちろん、そこには方法に対するアイロニカルな側面はあるものの、そのシリアスな側面として、些細な対象が探求を遂行する上で有効活用できることを示唆している。パラダイグマの方法は、まさにその活用であると言えるだろう。

¹ プラトン対話篇およびアリストテレスの著作への言及は全て OCT 版に基づく。プラトン全集第 1 巻および『国家』に関しては新版を用いた。

² 例えば、Rowe (1995b, 201; 1996, 163n25) および Ricken (2008, 236) を参照。また、Lane (1998) や Sayre (2006) のように、両者の関連性を主張する研究であっても、その解釈は本稿が問題とする重要なテキスト (*Plt.* 278a8-c6, e4-10) の分析に基づいているとは言えない。

³ ここで言及されている文字綴りの学習を、Kato (1995, 170-1) はさまざまな綴りを通して文字それ自体を習得することを目的としたものと解し、『テアイテス』206a での、文字の習得の仕

方（文字をひとつひとつ識別し学ぶことによる）との齟齬を、文脈と視点の違いに帰して説明している。しかし、『ポリティコス』での文字綴りの学習の目的は、文字それ自体を学ぶことではなく、すでに文字それ自体を習得した子供が、「様々な単語の綴りを学ぶこと」である（285c8-d3）。他方の『テアイテス』での文字綴りの学習は、単語の綴りを学ぶ以前の、子供が文字それ自体を習得する段階である。

⁴ 『パルメニデス』132d1-7を参照。類似関係の双方向性に関しては、Owen（1953, 83n22）、Schofield（1996, 66-8）を参照。

⁵ Schofield（1996, 67-8）はアイデアのコピーたる感覚物が有する、アイデアとの類似性に程度を認めているものの、非双方向性をもたらす「欠陥ある仕方での類似（deficiently like）」を、プラトンは認めていないとして退けている。本稿の立場は、類似性の双方向性を認めつつも、原物と像の場合には厳密な意味での「同じ類似性」は成り立たないというものである。

⁶ 『パルメニデス』では「ある点で「同じ」という状態を被ったものは類似している（τὸ ταῦτόν που πεπονηθὸς ὁμοιον）」（139e8）と言われ、Schofield（1996, 70）はこれを類似の分析と見なしている。

⁷ あるアイデアとそのアイデアを分有する個物が類似すると言われる場合でも、類似を成立させる観点はそのアイデアが特権的に有するものである（*Phd.* 74c-d）。

⁸ Rowe（1995b, 201）も「同じ類似性」という表現に着目しているが、「第三者に基づく二項間の類似性」ではなく、「二項それぞれの第三項への類似性」と解している。他方、Campbell（1867, 82）は「同じ類似性」を「同じ相を被り類似した状態（ὁμοιον τῆς αὐτῆς ιδέας πάθος）」と言い換えている。彼はそれ以上説明を加えていないが、例えば、同じ「青」という相が、空や海などに現れる場合、両者は類似した状態にあると言えるように、本稿同様の理解をしていると思われる。合わせて注6も参照。

⁹ この点に関しては、注3を参照。

¹⁰ 例えば、テータ（Θ）とタウ（Τ）は混同される傾向にあった（*Th.* 207d-208a）。

¹¹ 「常に自らと同じであり同一である（ταῦτόν αἰεὶ κατὰ ταῦτὰ ἑαυτῶ）」（278b7-c1）と同様の表現は、アイデアの自己同一性を表す場合に用いられる（*Phd.* 76d5-6; *Soph.* 249b12; cf. *Plt.* 269d5-6）。

¹² 分割法における「類（γένος）」や「種（εἶδος）」は、時としてアリストテレスにおける *infimae species* を参考に「自然種」と訳される（cf. Wedin 1987, 209n7）。しかし、Ricken（2008, 100-1）が指摘しているように、プラトンが「類」と認めるものを（例えば男性や女性、偶数や奇数など）、アリストテレスが「類」と認めるとは限らない（cf. *Met.* X9, 1058a29-36; *An. Post.* A4, 73a34-b5）。したがって本稿では、Brown（2010, 153n3）のように、「類・種」を「自然種より広義で、自らの本性（φύσις）ないし本質（οὐσία）を有するもの」という意味で用いる。パラダイグマが明らかにする「同じ本性」を共有するもの「全体」も、この意味で「類」と言えるように思われる。

¹³ 『ソフィステース』253d-eのディアレクティケーに関する記述の解釈に関しては Gómez-Lobo（1977）に従い、d1-3を分割法に関する記述と見なす。

¹⁴ T写本の ὡς を読む。καὶ を読む場合（familia β と W 写本）、訳は「それぞれおよび両者について」となる。だが、Skemp（[1952] 1987, 161）が指摘しているように、「両者について」という表現は、結局のところ「両者としての両者について」を意味するため、ὡς の方が意味の通りがよい。

¹⁵ Campbell（1867, 83）も συναχθέν をテクニカルタームとして『パイドロス』での分割と総合と関連づけているものの、διεσπασμένον を『ソフィステース』253d5-e2のディアレクティケー規定と関連づけている。しかし、本稿は『ソフィステース』の 253d5-e2の解釈に関しては Gómez-Lobo（1977）に従い、分割法ではなく「ある」と「ない（異）」に関する記述として扱う。

¹⁶ 写本通り παραδείγματος を読む。

¹⁷ 写本通り μέλλοντες を読む。

¹⁸ 例えば「全ての技術」(*Soph.* 219a8)や「全ての知識」(*Plt.* 258c6)、「我々が製作し獲得するもの全て」(*Plt.* 279c7-8)のように、全体性が強調される。

¹⁹ 総合を分割と相補的に解する研究は Hackforth (1945, 143)、Wedin (1987, 211-4)、Brisson et Pradeau (2003, 242-3n213)、小池 ([1982] 2007, 156-7)。

²⁰ 例えば、捕獲術の分割では次のように全体性が強調される。「捕獲術のうち、公然となされるもの全体 ($\delta\lambda\omicron\nu$) は闘争的、密かになされるもの全て ($\pi\acute{\alpha}\nu$) は狩猟的と定める」(*Soph.* 219e1-2)。

²¹ Cavini (1995, 132-3)、Brisson et Pradeau (2003, 26, 219n43) を参照。

²² Kato (1995, 162-5)、Lane (1998, 21-33) を参照。

²³ Dixsaut (2001, 246) は、魚釣り師のパラダイグマがソフィストの探求において何の役割も担わないと言い切っている。Ricken (2008, 147n99) も彼女の見解を支持している。

²⁴ 分割の出発点となる類を定める「先行的」総合である (Rowe 1995b, 203)。注 19 を参照。

²⁵ この二つの原因の区別は、宇宙論の文脈での生成の補助原因と原因の区別に対応する。生成の原因は万物を最善の状態に秩序付けるヌースであり、補助原因はそのために必要となる物體的な必要条件である (*Phd.* 99a-b; *Tim.* 46c-d; *Phlb.* 27a)。道具類を供給する技術は、道具が製作のための必要条件であることから、製作の補助原因としてのステータスを有する。また、宇宙論の文脈では補助原因が原因として取り違えられる傾向にあると批判されるが、機織り術と政治術の場合では、その取り違えが「多くの競合者に囲まれる」事態を生み出す要因のひとつとなっていると言える。

²⁶ Rowe (1995b, 239) および Ricken (2008, 166, 216) は「結合」を政治術と機織り術に共通の類と考えている。Ricken (2008, 216, n121) はさらに「自らに依存する技術 (補助原因と原因) と関係を有する技術」も両者に「共通の類」と言い切り、両者に「共通する要素」として結合しか認めない Owen (1973, 359-60) を非難している。Bates (2004, 112-3) も両者に共有する特徴として結合しか挙げていない。

²⁷ 「像」の分割に関しては『ソフィステース』235c-236c を参照。

²⁸ 時として、両者は同じものと見なされる (Rowe 1995a, 22-4; 1995b, 210-2; 1996, 163-4, n28; 小池 [1982] 2007, 169)。像とパラダイグマの区別の指摘は Ricken (2008, 165) に負う。Bates (2004, 111, 113) も両者を分けて考えているが、観点を変えれば同一の x-y 間にパラダイグマおよび像の関係性がともに成立する可能性を指摘している。しかし、二つの事物間の存在の身分の同源性・不等性によって、パラダイグマと像は厳密に区別されるべきと思われる。

²⁹ cf. *Soph.* 239d-240b, 266a-d; *Plt.* 306c10-d5

³⁰ 「例示」は、客人による「パラダイグマ」への語源的なほのめかし $\text{‘}\pi\alpha\rho\alpha\tau\iota\theta\acute{\epsilon}\mu\epsilon\nu\alpha\ \delta\epsilon\iota\chi\theta\eta\text{’}$ (278b4) を踏まえた上での訳語である (Campbell 1867, 82)。

³¹ 主な研究を挙げる。「モデル」は Rowe (1995b, 201)、Notomi (1999, 123)、Gill (2006)、納富 (1991) など。加藤 (1992) はパラダイグマとなるものとパラダイグマによって示されるものとの間に価値的な大小関係があることから「雛型」と訳しているが、「モデル」に近いと思われる。Kato (1995) では訳されず *‘paradeigma’* と記述され、訳語が与えられても一貫していない (example (166)、model (170))。「例」は Campbell (1867, 80)、Skemp ([1952] 1987, 157)、Lane (1998)、Sayre (2006)、Ricken (2008) など。Dixsaut (2001) および Brisson et Pradeau (2003, 45-6) は *‘paradigme’*。

³² アリストテレスは「ある全体における部分と部分の関係」としてパラダイグマを定義している。「だが、[パラダイグマは] 全体の部分に対する関係、部分の全体に対する関係、全体の全体に対する関係としてあるのではなく、部分の部分に対する関係、似たものの似たものに対する関係としてある。すなわち、両方の事物が同じ類 ($\tau\acute{o}\ \alpha\upsilon\tau\acute{o}\ \gamma\acute{\epsilon}\nu\omicron\varsigma$) のもとにあり、一方が他方よりも知られやすい場合に、[一方は他方の] パラダイグマとなる」(*Rhet.* 1357b25-30)。しかし、プラトンのパラダイグマの使用例から判明した相違点は、プラトンにおけるパラダイグマは、「部分と部分の関係」に終始するのではなく、「同じ類」たる「全体」を規定するためにも用いられているということであった。

³³ 写本通り διαρητικὰ を読む。Hermann 校訂の διαρητικὰ を読めば「分離を行うもの」。

³⁴ したがって、Sayre (2006, 77) のように、第六定義でのパラダイグマの使用を本来の使用でないとはいきる必要はない。

[参考文献]

- Bates, David F. 2004. "A Note on Plato *Politicus* 285d9-286b1," *Classical Quarterly* 54 (1), 109-116.
- Brisson, Luc. et Pradeau, Jean-F. 2003. *Platon, Le Politique*, Flammarion.
- Brown, Lesley. 2010. "Division and Definition in Plato's *Sophist*," in *Definition in Greek Philosophy*, David Charles, (ed.), Oxford University Press, 151-71.
- Campbell, Lewis. 1867. *The Sophistes and Politicus of Plato, with a revised text and English notes*, Clarendon Press.
- Cavini, Walter. 1995. "Naming and argument: Diaeretic logic in Plato's *Statesman*," in Rowe (1995a), 123-38.
- Dixsaut, Monique. 2001. *Métamorphoses de la dialectique dans les dialogues de Platon*, Vrin.
- Gill, Mary L. 2006. "Models in Plato's *Sophist* and *Statesman*," *Journal of the International Plato Society* 6, 16pp.
- Gómez-Lobo, Alfonso. 1977. "Plato's description of Dialectic in the *Sophist* 253d1-e2," *Phronesis*, 22, 29-47.
- Hackforth, Reginald. 1945. *Plato's Examination of Pleasure*, Cambridge University Press.
- Kato, Shinro. 1995. "The Role of Paradeigma in the *Statesman*," in Rowe (1995a), 162-72.
- Lane, Melissa. S. 1998. *Method and Politics in Plato's Statesman*, Cambridge University Press.
- Notomi, Noburu. 1999. *The Unity of Plato's Sophist*, Cambridge University Press.
- Owen, Gwilym E. L. 1953. "The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues," *Classical Quarterly*, NS 3, 79-95.
- . 1973. "Plato on the Undepictable," in *Exegesis and Argument*, E.N. Lee et al. (eds.), Van Gorcum, 349-61.
- Ricken, Friedo. 2008. *Platon Politikos: Übersetzung und Kommentar*, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Rowe, Christopher J. 1995a. *Reading the Statesman: proceedings of the III Symposium Platonicum*, Academia Verlag.
- . 1995b. *Plato Statesman, edited with Introduction, Translation and Commentary*, Aris & Phillips.
- . 1996. "The *Politicus*: Structure and Form," in *Form and Argument in Late Plato*, Christopher Gill and Mary M. McCabe (eds.), Clarendon Press, 153-78.
- Sayre, Kenneth M. 2006. *Metaphysics and Method in Plato's Statesman*, Cambridge University Press.
- Schofield, Malcom. 1996. "Likeness and Likenesses in the *Parmenides*," in *Form and Argument in Late Plato*, Christopher Gill and Mary M. McCabe (eds.), Clarendon Press, 49-77.
- Skemp, Joseph B. (1952) 1987. *Plato: The Statesman*, Bristol Classical Press, 2nd edition.
- Wedin, Michael V. 1987. "Collection and Division in the *Phaedrus* and *Statesman*," *Revue de philosophie ancienne*, 5, 207-33.
- 加藤信朗. 1992. 「『ポリティコス』篇における「雛型」の論法について」, 『哲学』, 42号, 日本哲学会編, 55-75.
- 小池澄夫. (1982) 2007. 「分割法考案—プラトン後期対話篇への視点—」, 『イデアへの途』, 京都大学学術出版会, 149-80.
- 納富信留. 1991. 「自己を制作する言葉—プラトン言語論序説—」, 『哲学雑誌』, 106巻 778号, 39-58.